論壇

Argument

●美唄歯科医師会会長
小森　英世

「買物難民、医療難民」

モータリゼイションと規制緩和による流通業態の変化により、郊外に多くの大型ショッピングセンターができ、そこでは豊富な品揃えとワンストップショッピングなどの利便さで重宝がられ繁栄している。

一方で、従来の街の中心部がシャッター街と化しているのみならず、百貨店すら閉鎖においこまれている昨今。そのあおりで、歩いて行ける範囲の身近な日常の小売店・食料品店もなくなり結果、遠方へのアクセス手段を持たない社会的弱者や高齢者が、食べ物すら満足に気軽に入手することができずに、所謂「フードデザート　食料砂漠」が問題になっている。

車を運転しない人や近くに公共輸送がないなど、不景気のあおりを受けた経営不振による民間や自治体のバスの運行間引きによる、直接の影響を被ってきた過疎地の買物難民に加えて、従来便利とされてきた街の中心部に住む人にすら、このような生活を余儀なくされているという。

時代の流れの速さとはいえ、札幌大丸デパートの繁栄をみるまでもなく「街の中心の意味するところは鉄道や行政組織のあるところ」という、自分たちの寄って立つところの基本的な価値は、あくまでも大切にしたいものだ。余程地域に密着した立地なら別なのだろうが、地方においては人口減もあいまって、歯科界にも歯科医師過剰問題以外にも同様な問題をみてとれる。すなわち、バスの間引きや患者さんの高齢化、身よりのない生活環境などにより、従来から来院している患者さんが来れなくなったり、医療施設の整った都会に引っ越したりするケースが多く散見されるようになった。

頼る人とてなく頑張っているお年寄りが、往復のタクシー利用で2,000円以上を支払っている一方、再診料の窓口負担金が40円などという笑い話が、日常的に起こっているのが現実なのだ。せっかく負担が軽くてすむように作ってある医療システムも、これでは台無しであろう。

一方、色々な工夫や努力、アイデアを耳にするのは幾許かの光明である。

1．community busを走らせることにより、路線からはずれ不便している人の便宜を図る。気の利いた大病院では、自前の送迎用のバスを走らせているところも多い。自治体は、より切実なものとして、議会はもとより地域町内会・医師会・歯科医師会を束ね対策を練る必要がある。

　ここでは公衆衛生の啓発を図るなどという、ひと昔前の論法をこえた切実さで現実に対処せねばならない。

2．駅周辺や駅なかに、食料品購入の場を無くすことのないように。行政も中心街に一部移転するなり、生死を分かつ脳外科や胸部外科の病院については、街なかから当該病院まで無料でピストン輸送のシステムを作るなどする。即ち、意識的に利便性を誘導することにより価値を高める政策をとることが大事だ。最近のNHKクローズアップ現代での「食の砂漠」の放映では、学生寮を駅周辺に多数集め、結果的に集客力を高め、否応なく食料品店を誘致することに成功した英国のケースを紹介していたが、学ぶべき発想方法といえる。このように、活気を取り戻すことが人口増加につながり、診療所反映につながる基盤となる一つの要素である。

3．ローソンプラスのような小単位でかつ安価な食料品を扱うコンビニが、民間から支持され普及拡大の方向にあるのは、ニーズがあるから当然としても大いに歓迎すべき流れだ。

地産地消のミニ店舗もその流れだし、郵便局や農協をお年寄り管理の拠点としたり、さらにはコンビニ化をすすめ食料品も手にはいるようにするなど、地域の核として極端な利益追求に走らない組織の再構築により新しい未来の形が垣間見えてくる。ありあまる歯科医院の店舗も業態の縛りをゆるめ、公共性利便性の観点から役立つと考えれば、本当に小さなコンビニとしても、はたまた患者さんの作る農産物や漬け物の紹介、要介護や認知症の患者さんの歯科としてのリコールを通じての病態把握を、関係部署に取り次ぐなど行政の出先としてもお手伝いできるような規制緩和を図るほうが、診療報酬増点よりも余程効果的と考える。シャッター街や空洞化したなかにポツンとたたずんで存在するよりは、誰にとってもいいと思うが。